

■ゴールドの価格急上昇、ドル・ユーロなど信用貨幣の信認低下、金融バブルとAI投資の危うさ、関税戦争＝富の囲い込み、排外主義・ファシズムの台頭等々をつらつらを考える

体調不良とはいえ、このまま横臥したままだとフレイルになり、脳ミソまで腐ってしまいそうなので、頭に浮かぶことを書き留めてみます。9月12日のFB投稿の続編です。

この数か月間のゴールドの価格高騰を見ていて、つくづく思います。現在の世界における「金融経済」と「実体経済」のギャップの甚だしさは、明らかにバブルの様相を呈している。それを見抜き、その破裂を恐れる人々が、ドルなどの信用貨幣やそれに依存した株や債券やステーブルコインの世界から離れ、ゴールドに向かっている。価値の実体＝労働の裏付けをゆるぎなく持ち、価値の真の表象でもあるゴールドへの軸足の移動は、いわば本来の資本主義への「回帰」、裸の資本主義の顕現である…。

金融化した経済は、これまでに何度もバブル崩壊を経験してきましたが、次に起きる崩壊はさらに巨大化する可能性があります。片や、前例のない規模に膨れ上がる金融経済、擬制資本・架空資本の世界。他方で、現実資本の世界は、利潤率の傾向的低下の法則の貫徹によってみすばらしい有様。この両者の間には、前者を後者に引き寄せる巨大な収縮エネルギーが溜まっています。この収縮は、2008年のリーマンショックを大きく上回る規模となっても決しておかしくありません。

賑わっているように見える株式市場も、マグニフィセント・セブンという少数の銘柄が引っ張っている危うい状況です。よく参照されるバフェット指数(米国株式市場の時価総額を国内総生産で割った数値)も、217%を超えています。100%を超えると割高とされ、2000年のITバブル時でも約150%、2008年リーマン前で約110%程度でした。この指数は、「低金利環境」や「企業の自社株買い」などで切り上がっている面もあるとはいえ、史上最高水準の217%での高止まりは不自然です。

確かに、近年のAIブームが資本主義の新たな発展を生むという観測もあります。しかしこの新分野でも、投資→技術発展→新需要の喚起→さらなる投資という循環は、実際の利益によって十分には裏打ちされていません。半導体設計、創薬、物流最適化など一部の産業で効率性を高めたとはいえ、その成果が「社会全体の利潤率改善」に結びついていません。超寡占(マグニフィセント・セブン)の収益独占を強めてはいますが、周辺産業や中小企業には波及していません。利潤が広く波及せず投資サイクルが持続しない限り、かつてのITバブルと同じく「期待崩壊→資金逆流→市場急落」という道筋もあり得ます。

もちろん、資本主義についての「経済的形態規定」(注参照)の議論が教えるところによれば、資本主義は延命する力の点で、しぶとく、かつ柔軟性を発揮します。「経済的実体」、つまり労働力の搾取の世界で行き詰まっても、架空資本・擬制資本、つまり株や債券の世界を肥大化させ、そこで「利息・配当・地代」といった所得を大稼ぎし、延命するどころか「繁栄」さえ生み出します。そしてこの金融バブルが行き詰っても、次にはIT化やAI化を梃子にプラットフォーム企業などを誕生させ、利用者を

囲い込み、データを収集・加工・独占し、巨額の「賃料」を吸い上げるレント資本主義の仕組みを生み出します。

現実資本の生み出す「堅実な」価値の世界と、金融資本が生み出す「膨張した」架空資本の乖離は、現代資本主義にとってはある意味では「常態」でした。資本主義は国家の金融緩和・財政支出で何度も「延命」しましたし、FRB や各国中銀は危機を先送りする手段を持っています。バブルは必ずしも「リーマン型の突然崩壊」になるとは限らず、90年代日本のように長期的デフレと低成長、失われた30年・40年という形を取る可能性もあります。そして、AI資本の勃興によるレント資本化の新潮流も、資本主義の「形態規定」の意味を知れば、ある意味では必然でしょう。AI投資は電力需要や半導体産業などの部門では「実利」を生んでおり、これが短期的には支えになるかもしれません。

しかしながら、現在の「架空資本の規模の異常な拡大」と「実体的利潤率の低下」との「ギャップの程度」は歴史的に見ても異常です。レント資本も、実際に順当な蓄積サイクルを保証するほどの利益を上げ続けることができるかどうか疑問です。金融資本もレント資本も、その「経済的形態規定」が、「経済的実体」が陥った矛盾や危機を柔軟に乗り切る力、資本主義の延命の力となり得るのか、危うい様相を見せています。架空資本の世界はすでに何回目かのクラッシュに近づいており、レント資本も極めて危うい収奪産業と化そうとしているように思えます。

いずれにせよ、資本主義経済は本質的に矛盾したシステムであり、その存続と発展の最大の障害を自分自身の内部に宿しています。だからこそ、自身の内部からその変革者＝墓掘り人が立ち現れない限り、歴史の舞台から引き下がることもないでしょう。それが舞台に立ち続けることのツケは、労働者と庶民に押し付けられる未曾有の災厄となって出現せざるを得ないでしょう。それはすでに、貧困と格差のいっそうの極端化とその拡大、戦争＝民衆同士の殺し合いの強制的頻発、民主主義の圧殺、強権政治や排外主義とファシズムの席捲等々として現実のものになり始めています。労働者、庶民は、墓掘り人としての務めを果たすため、現在がどのような時代かを知る必要があります。

●注:経済的形態規定とは？

「形態規定」を知ることは、現代資本主義の矛盾や、その新たな進展、金融化・レント資本化を考える際に不可欠です。ここで言うのは、その極めて簡単な説明です。

しかしその前にまず、「形態規定」の対語となる「実体規定」とは何でしょう。それは、事物が本来的に持っている性質や中身のことで、例えば「労働」は「自然を変えて人間の生活を維持する活動」という性質を持ちます。では、「形態規定」とは、その実体が、社会的な関係の中で特定の「形」として現れることです。例えば、「労働」は資本主義では「賃労働」という形でしか存在できないということです。経済現象として現れる「賃金」、「利潤」、「資本の増殖」などは自然現象ではなく、特定の社会関係＝歴史的形態によって現れているにすぎないということです。

資本主義の各歴史的段階と形態規定の展開を見てみます。

まず、産業資本の段階では、労働者が労働力を売り、資本家がそれを用いて生産します。労働者の剰余労働が「剰余価値」として資本に取り込まれます。資本の増殖は、まだ労働の搾取と結びついて見えます。

次に、金融資本の段階(19世紀後半～20世紀)です。

利子・配当・株式・債券が広がり、「お金がお金を生む」ように見えます。本当は搾取した剰余価値の分配でしかないのですが、資本そのものに生命力があるように映ります。ここでは、典型的な「形態規定」が作用しています。

さらに、レント資本化の段階(20世紀後半～現在)です。

ここでは、不動産・知的財産権・特許・プラットフォーム企業(GAFAなど)が主役です。労働や生産過程を経由せず、所有権そのものが収入を生むように見えます。「資本の自動増殖」のイメージがさらに強化されるのです。

しかし、「経済的形態規定」という見方にとって重要なことは、「資本の生命力」に見えるものの正体を暴きだす点にあります。どういうことか。それは、資本は自ら価値を生み出しているわけではないこと。常に労働の剰余価値に依存していること。にもかかわらず、「形態規定」を通じて、資本は自動的に振舞う不死の存在として現れること。金融化・レント資本化の進展は、この仮象をさらに強固にするのです。

まとめれば、次のようにも言えます。資本の支配は「自然の必然」ではなく、歴史的に形成された形態規定にすぎない。したがって、制度を変えれば資本の支配も変え得る。「資本が永遠に生き延びる」というイメージを打ち破る視点が、社会運動にとって不可欠だ。以上が、「経済的形態規定」の議論のキモだということです。

念のために、箇条書きしておきます。

- 実体規定＝労働が価値を生む。
- 形態規定＝資本が自動的に増えるように見える。
- 金融化・レント資本化＝この「見かけの生命力」を最大化する仕組み。だがその根っこは常に労働の搾取にあり、したがって資本主義は歴史的に超えうる体制である。
- 資本主義を脱した社会＝経済の実態である「労働」の交換を「労働証券(労働バウチャー)」などを媒介に行う経済、「形態規定」を必要としない社会。「形態」が人々を支配するのではなく、人々が「実体」をコントロールできる社会。

■参考文献

- カール・マルクス『資本論』第1巻「商品と貨幣」、第3巻「利子生み資本論」。
- 大谷禎之介『資本システム批判の方法と理論』
- 佐々木隆治『マルクス 資本論(シリーズ世界の思想)』